

研究主題 知識・技能の活用を図る学習活動に関する 指導展開例の作成

小学校 4 教科 (国・~~社~~・算・理)
中学校 6 教科 (国・~~社~~・数・理・英・家)

【研究総括担当者】 佐藤 亥 吉 齊藤 義 宏
【社会科担当者】 佐々木 真 佐藤 淳 一
佐藤 亥 吉

1 はじめに

学習指導要領改訂後、「活用」というキーワードが取り上げられていますが、活用を意識した授業とはどのようなものなのでしょうか。

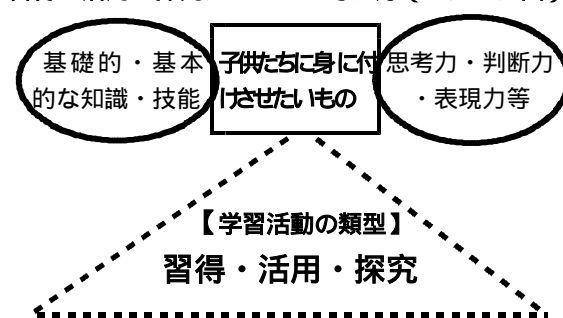
本項では、活用を図る学習活動の考え方や指導方法等を追いながら、現在当センターが作成している指導展開例について紹介します。

2 「活用」をこう捉える！

(1) 「活用」は学習活動の類型の一つ

今回の学習指導要領の改訂では、思考力等を育成するための手立てとして、「習得・活用・探究」という学習活動と学習の流れが規定されました。この規定では、児童生徒に身に付けさせたいものは「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」であることを前提とした上で、「活用」はあくまでも知識及び技能を活用する（考えながら使う）という学習活動の類型の一つとして示されています。表現を変えれば、活用は目的ではなく、課題解決する過程において、思考力等の力を身に付けさせるための方法・手段になります。

習得・活用・探究についての考え方（イメージ図）



(2) 「活用」は指導方法を見直すチャンス

課題を解決するために知識・技能を活用する場合には、ある単一の知識や技能だけを用いても課題を解決するには至りません。児童生徒が、観察・実験やレポートの作成、論述といった学習活動に取り組む際に、自らが既に持ち合わせている知識・技能を使える状態にするとともに、周りの人や書物といった資源に近づき実際に利用する必要があります。このような学習活動の質が、学習成果に影響を与えられと考えられます。

「活用」という学習活動について、「今までもやってきている」という先生もいれば、まったく新しい課題と受け止めている先生もいると思います。いずれにしても、授業とはいったいなんなのかということを確認する機会であることは間違いありません。私たち教師にとって自分たちの指導方法を見直すチャンスと捉えていきましょう。

(3) 探究活動をヒントに指導方法を改善する

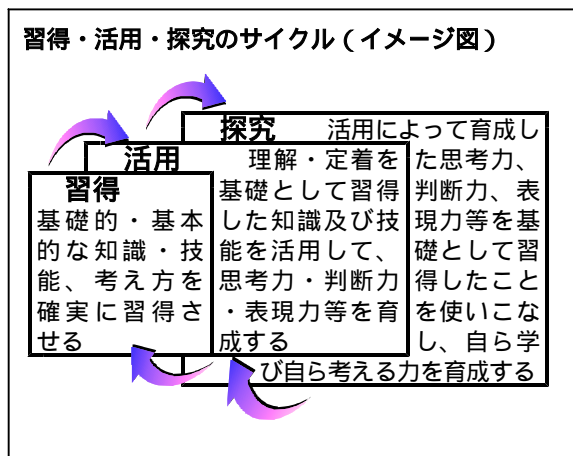
では、具体的に指導方法をどのように見直して、改善を図ればよいのか。ここでは、教科指導の最終目標である「探究的に学び続けようとする指導」という側面から考えてみます。探究活動については、学習指導要領解説総合的な学習の時間編でプロセスが示されているように、課題を見付けることに始まり、その問題の解決のためにどのような情報が必要なのか、それはどうやれば収集できるのかについても考えたり、判断しなければならなくなります。さらに、

考えをどのようにまとめ、表現すればよいのかについても考え、他者との情報交換を効果的に行うことも必要になります。このプロセスに指導方法の改善へのヒントがあります。前述したように、思考力等を育成するための手立てとして、「習得・活用・探究」という学習活動と学習の流れが規定されたことを考えれば、当然、探究活動のプロセスが活用を図る学習活動にも適用され、接続されていくことが望ましいと考えられます。但し、前記したプロセスの全てを備えることを想定する必要はありません。単元を見渡し、「なんのために、どの時間のどこで、なにを使って、どのように知識・技能の活用を図る学習活動をするのか」「その結果、児童生徒はどのようになればよいのか」ということを見直しの視点としたうえで、探究活動のプロセスの個々の学習活動を効果的に位置付けていくことが改善につながります。

(4) **授業構想の留意点は・・・**

「習得・活用・探究」は学習活動の類型を示したものであり、一体のものとして捉えることが大切です。三者の時間的、量的、内容的な枠を決めることが大事なのではなく、バランスよく取り組むことが優先されなければなりません。このことは、単元構想の必要性の根拠となります。児童生徒の学習は、教育課程に基づく指導計画に沿って一時間一時間の授業によって進展していきます。各時間や各単元の指導内容は系統や発展のある計画の基に位置付けられていますから、各時間の指導は、常に新しいものを学ぶのではなく、何らかの意味でこれまでに学習したことの続きや発展として学ぶこととなります。つまり、習得した知識・技能をつなげ活用していくこととなります。このことを児童生徒に意識させ、活用のねらい、対象、方法、及び活用することによって生み出される良さなどを強調し、児童生徒が今後、知識・技能を意欲的に活用していこうとする態度を育てていくことが大切です。その意味からも振り返りの場の設定と意義を大事にしたいものです。また、習得・活用・探究を一方通行の過程として捉えたり

段階的に捉えたりするのではなく、活用することで確かな習得がなされたり、探究的な活動の中で習得と活用が繰り返されたり等、様々なプロセスがあることを確認する必要があります。例えば、活用することにより「前にやった勉強はそういうことだったのか」という、習得すべき知識がより深く理解されるということもあります。このようなサイクルを指導計画に意図的にのせていきます。



(5) **言語活動を踏まえる**

実際の授業の指導にあたっては、知識・技能の活用を図る学習活動は、言語によって行われるものであることから、全教科にわたって、充実が図られた言語活動を踏まえて取り組むことが重要です。特に、言語活動としての「記録、要約、説明、論述の能力」が問われており、中核となる学習活動としては、「説明する」ことが重要となります。「説明する」ことができるということは、対象となる学習内容を理解し、それについて考え、その考えを基に表現できるということです。ここに、論述する能力が育成されるものと考えられ、今回の学習指導要領の改訂で充実すべき重要項目の第一に、「言語活動の充実」が挙げられている根拠と捉えることができます。詳しくは、「中央教育審議会（答申）（平成20年1月27日、pp.53～54）を参考として下さい。学習指導要領で求められている「言語活動の充実」にかかわる内容が掲載されていません。

3 社会科

(1) 社会科における「活用」の基本的なとらえ

『「活用」に関する指導資料』(H20岩手県教育委員会)に基づき、社会科においては、以下のような学習活動を、「活用」に関する学習活動ととらえています。

<p>問題解決に必要な資料を収集・選択するとともに、資料から必要な情報や事実を読み取る。【読み取り】</p> <p>読み取ったことを比較・関連付け・総合しながら再構成し、社会的事象の意味、意義を解釈する。【再構成・解釈】</p> <p>事象の特色や事象間の関連を考え、それらを自分の言葉で表現する。【表現・説明】</p> <p>考えたことを伝え合い、話し合いをとおして互いの考えを発展させる。【話し合い・論述】</p>

(2) 指導展開例作成にあたっての留意点

問題解決的な学習を重視する

「活用」に関する学習活動は、児童生徒の思考の流れにそった学習活動として展開していく必要があります。そのためには、社会科指導の要点として「学校教育指導指針」で示されている「課題把握 予想 追究 交流 まとめ」といった問題解決的(課題追究的)な学習過程の中に「活用」に関する学習活動を位置付けた授業を構成していく必要があります。基本的には右図のように位置付けていくことが考えられます。

問題解決的な学習過程	学習活動
課題把握 (情報の収集・分類・比較, 問題の発見)	読み取り
予想 (予想の提示, 仮説の設定)	
追究 (仮説の根拠となる資料の収集, 検証)	再構成 ・ 解釈
交流 (検証結果の説明, 意見交換)	
まとめ(ふり返り) (まとめ, 応用, 新しい問いの発見)	表現 ・ 説明
	話し合い ・ 論述

学習内容の構造をとらえる

基礎的・基本的な知識、概念や技能の確実な習得と、その活用を図る学習活動を展開するために、学習指導要領が示す指導事項や指導内容を基に、単元の学習内容の構造化図を例示しました。

社会科の学習は、ややもすると個別事象の並列的な提示と記憶に傾いて、ひとまとまりの学習内容の焦点がつかみにくくなりがちだと指摘されます。何を読み取らせ、何を考えさせ、何を表現させるのか、各単元で理解すべき学習内容を構造化してとらえることが大切です。単元の学習内容の構造化図を使用し、活用を図る学習活動のもととなる知識や技能をしっかりとおさえた上で授業を構成していきます。

言語活動の充実をはかる

中央教育審議会答申(平成20年1月)で示されているように、基礎的・基本的な知識、概念や技能の確実な習得とともに、その活用を図る学習活動の基盤をなすのは言語能力であり、その育成のためには言語活動の充実が不可欠となります。答申では「資料から必要な情報を集めて読み取る」「社会的事象の意味、意義を解釈する」「事象の特色や事象間の関連を説明する」「自分の考えを論述する」活動を一層重視することが示されています。

これまでも様々な資料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力と態度を育てることを目指し、創意工夫された学習がなされてきています。すなわち、今回の改訂の要である言語活動の充実は、現行の学

習と軌を一にするものと言えます。「活用」という全く新しい学習活動があるのではなく、これまでも行ってきた言語活動にかかわる学習を一層充実する観点に立って、指導展開例を作成しました。

(3) 指導展開例について

単元の指導展開例

小学校の単元指導展開例では、図1のように、一単位時間の授業の中で、読み取り、再構成・解釈、表現・説明話し合い・論述の四つの学習活動のうち、どれを焦点化するか、問題解決的な学習過程のどこに位置付けるかを示し、具体的な授業の流れなどをイメージできるように作成しました。

中学校の単元指導展開例では、図2のように、習得・活用していく道筋を明らかにするために、学習指導要領が示す指導事項や指導内容を基に取得すべき知識、概念の明確化を図り、それらを学習内容の構造化図として示しました。また、それを基にした評価計画も示すこととしました。

単位時間の指導展開例

単位時間の指導展開例の基本型は、図3のように左ページに本時の展開例「活用」の具体的内容や手順を示し、右ページに教師の発問や資料等の学習活動の紹介を示しました。

囲みの部分は、小学校の指導展開例では、学級担任が授業を行うことができるように、本時に身に付けさせたい知識・技能・概念を示し、中学校の指導展開例では、本時の具体的内容の関係を示すこととしました。

4 おわりに

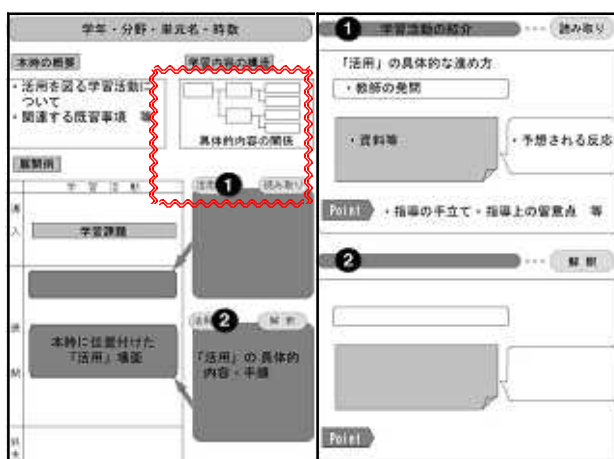
作成中の指導展開例は、「活用を意識した授業」をどのように作っていけばよいのか、授業者のイメージづくりを支援するものです。年度末には、当センターwebページに、指導展開例集として掲載いたしますので、ご活用下さい。



【図1】小学校の単元指導展開例



【図2】中学校の単元指導展開例



【図3】単位時間の指導展開例